
ジョーカーな狐と狸さん

ぺんぱるぺ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ジョーカーな狐と狸さん

【NZコード】

N8951Z

【作者名】

ぺんぱるペ

【あらすじ】

隔離された世界。鬼と呼ばれる化け物とこの世界は密接な関係にある。鬼は人を喰い殺し、ときには、鬼は人に能力を与える。中央エリアの片隅に住む香宮司 旧介は、復讐相手を探し続けていた。そして、復讐相手とうりふたつの少女が目の前に現れる。少女は頬を赤く染め、小さな声で告白した。「あなたのストーカーです。大好きです、付き合ってください！」僕さま青年とストーカー少女のお話です。

狐の世界の終わつ（前書き）

初めまして。

小説と言えるかも分からぬ代物ですが、お読み頂ければ幸いで
す。

狐さんの世界の終わり

その日、香宮司 旧介の世界は終わりを迎えた。

何よりも大切で、陳腐な言葉を使うなら愛していたと表現しても良いような、掛け替えのない世界であった。

最後は笑つてしまふほどに呆氣ないものだ。馬鹿馬鹿しいものでしかなかつた。

それでも、そんなくだらない崩壊でしかなかつたとしても、旧介には永遠のことと思えて仕方ない。

自慢の長い髪を優雅に揺らし、旧介の全てであつた彼女は美しく微笑んだ。神がいるならば、彼女のような存在であるのやもしかない。そう思わせる程のものを彼女は持つていた。

すらりとした足が、ゆっくりとこちらへ近づいて来る。旧介は逃げなかつた。いや、正確に言つならば、逃げることなどできなかつた。誰がこの状況で彼女から逃れられるだろうか。

旧介の身体はもうボロボロだつた。腕は折れ、腹は切り裂かれ、激痛にただ堪えるだけしかできないような状態である。しかし、だからといって、旧介が無傷で体力も余つていたとしても、彼は逃げるなどという愚かな選択はしなかつただろう。

旧介の世界は終わつたのだ。彼女は旧介の世界を作り上げ、慈しみ、そして破壊した。彼女がそうしたのだ。いや、彼女は彼女であつて、彼女ではないのやもしれない。しかし、もうそんなことはどうでもよかつた。

彼女は旧介を殺すだろつ。簡単に、一瞬で全てを終えるに違ひない。それはあまりに残酷であり、恐怖であり、そして何よりも幸福感なことであるのだ。たとえ旧介がここで生き残つたとして、何が残るというのか。何も残らない。なぜならば、それが香宮司 旧介であつたからだ。彼女が居て、初めて彼は息をすることができる。

「お前は笑うのね」

鈴を鳴らしたような、澄んだ聲音だった。

聞き親しんだ彼女の声は、こんな時でさえあまりに心地好く旧介の鼓膜を侵していく。

地面に倒れ込んだ旧介を真っ直ぐに見下ろす彼女は、どこまでも美しい存在だった。

「逃げないのか？ 私はお前を殺すのに。それは何があつても変わらないし、変えられない選択だ」

「逃げて、欲しいの、か？」

呼吸をしただけで苦痛に悲鳴をあげる身体を酷使して、どうにか声を紡ぎだす。彼女からの言葉を無視するなどできるわけがない。彼女を見上げ、旧介は笑いかけた。

それを見て、彼女は初めてその笑みを崩してしまった。不愉快そうに曲げられた眉も、軽蔑していることを何より物語る細められた目も、何もかもがただ美しく、愛おしい。

恍惚とした表情を惜し気もなく晒す旧介を一瞥し、彼女は『彼女』を演じることをやめた。

「……私は長生きしているからさ、人間なんてそりゃあ腐る程見てきたよ」

先程までとは何もかもが違う低い声と不機嫌に歪められた顔。もはやそれは彼女ではなかった。

「でもアンタみたいな気持ち悪いやつ見たのは初めてだ。最低最悪な気分になつた、すげえ吐きそつだし」

「死ね」

「おや、やっぱり私じゃ優しくしてくれないのかな？ そっちの方が似合つてるよ、アンタ」

「黙れ、カスガ。僕はあの人には用など無いんだよ、早くくたばれ」

「素敵な言葉と憎悪だね、アンタやっぱいいよ。そっちの方がかっこいいし、私のタイプだわ」

今までの心酔しきつた感情は瞬く間に消滅する。今、旧介にはは酷い憎しみと嫌悪感だけであった。

それは夢を見ていたようにも思えることだ。悪夢ではない。素晴らしい幸福な、死んでも覚めたくない、そんな夢である。しかし、夢は何があろうと夢でしかない。夢は終わる。旧介の世界が終わるようだ。無情なまでに、一切の慈悲もなく。

彼女はもう彼女ではない。彼女の姿をした化け物だ。化け物よりもっと酷いものかもしれない。旧介は彼女の皮を被つたそれを睨みつけた。それは愉快そうに肩をすくめるだけだ。

（殺してやりたい。いや、そんなもんじゃ足りないだろうが…。このカスが存在していたその事実を消してやりたい。それができれば、僕は笑つて死ねるだろう）

旧介の目線を考慮したのか、そいつはしゃがみ込んだ。彼女の目から通されるそいつの視線は不快でしかなかった。

旧介は静かに目を閉じる。旧介が見たかったものは、彼女だけだ。あとは何もいらない。むしろ、邪魔な不要物でしかない。

「私はお前を結構気に入ってるんだよ、旧介」
「気安く、名前を、呼ぶな」

旧介と呼ぶ」とを許したのは、彼女以外にはいない。

「なあ、旧介」

吐きそうだ。

ねつとりとした重い声が身体にのしかかる。それは旧介を決して逃がしてはくれない。

「私を殺しにおいでの

からからとそいつが愉しそうに笑い声をあげる。

殺しに？行くに決まっているだろ。もはや傷の影響で声も出ない。それでも、旧介はそいつへの復讐を誓った。忘れたくとも忘れない、最低の誓いだった。

「約束だよ、旧介」

そうして、世界は静かに崩壊を迎えた。何も残らない筈のその世界には、憎悪と殺意だけが暗く、しかし、確実に残っている。

殺してやる。そう息もなく吐き出したと同時に、旧介の意識は途絶えた。

出合つてからの黙れ変態

「大将、大将、起きましょーや……今日仕事でしょ」

低くしゃがれた声が鼓膜を突き破る勢いで侵入する。

また、瞼を閉じていても分かる程の眩しさに、旧介は不満げに唸り声を上げた。

熟睡していたからか、身体が鉛のように重い。

もう朝であるにも関わらず、睡魔はいまだに旧介を逃がそうとはしなかつた。はつきりしない意識のまま、旧介は何とか瞼を開く。瞬間、待っていましたとばかりに、視界を日光が埋め尽くした。

（……ねみイ）

欠伸を噛み殺し、旧介は心地好い布団から、嫌々ながらも這い出る。

明るさにも目が慣れてきたようで、部屋全体を緩慢に見回すと、慌ただしく動き回る影が視界に映り込む。

影は、男だった。

身長はざつと見たところ高い。坊主のように頭を丸めた大男は、旧介が起きたことに気づいたらしく、足早にこちらに駆け寄った。鋭く小さな目と、大きな鼻、そして何より口から頬まである大きな傷。相変わらずいつ見ても、恐ろしげな顔をしているな、と旧介は思った。

その厳つい男が目前まで迫つてきても、旧介は涼しげな顔を崩さなかつた。男の威圧感などもつとうに慣れていたのだ。

「大将、あんた今日……あの仕事の日なんですよ？ 分かつてます？」

「……あの仕事？」

意味が分からぬといった顔をして、旧介を見てから、男は大きな肩をがくりと落とした。その顔には「ああやはり」と書かれていた。旧介がこの件を忘れていただらう」とは、半ば予測していたらしい。

「仕事つてなに」

「……ホラ、鬼切りますとか言つたじやないですか」

「ああ、そういうやそんなことも」

「アンタねえ……」

呆れたとばかりにため息を落としてから、大男は「どうなつても私は知りませんからね」と早口に述べる。

その腕には先ほどまで旧介が眠つていた布団が抱えられている。どうやらおまけに布団も片付けておくようだ。いつたといつ之間に、と驚く旧介に気付かないまま、大男は続けた。

「あ、でも金はちゃんと分けてくださいよ。いや、本当に」

言いたいことは言つたと、大男は満足げに笑つた。そのずる賢さに旧介が冷えた視線を送れば、一転して彼はさつと表情を青ざめる。そして、旧介が何か言つ前に、逃げるよつにして男は隣の部屋へと走り去つていつた。

その無駄な逃げ足の速さには、いつそ称賛の言葉を送つてやつたいものだ。

（……それでも）

床は畳。あるものは箪笥と小さな机が一つの「かんまい」とした室

内。ここは旧介の部屋である。

嗅ぎなれた蘭草の匂いにぼんやりと漫かりながらも、旧介は部屋で一つしかない窓から顔を出した。

外は、暑すぎるわけでも、寒すぎるわけでもない、程よい気温である。

青い空を何とはなしに見れば、直ぐに視界の中に灰色をした物体が映り込む。無意識のうちに、旧介は顔を歪めていた。

そこには壁があつた。巨大な、天に向かつてどこまでも伸びているような、そんな壁だった。

この世界には、『鬼』と呼ばれる化け物がいる。

鬼は人間の天敵と云われてきた。何故なら、鬼の好物は人間だからだ。しかも、鬼は簡単に殺すこともできない、まさしく化け物といつてよい存在である。人間はただ食われるだけであつた。

しかし、ある科学者が鬼についての可能性を提示してから、化け物としての鬼の見方ががらりと変わる。その可能性は大きく分けて二つある。

一つ。鬼には高い知能を持つものがいる。

その中の大半の鬼は、人間と『契約』を結ぼうとする。

何故、鬼が人間と契約をしたがるのかは今のところ分かっていない。

契約を結べば、鬼は人間に力を分け与える。その能力の種類は千差万別だ。しかし、それはこれから何年、何十年と人間が進化したところで、確実に手に入れることのできない力である。

とはいえ、この契約はメリットばかりではない。当然だ。メリットの裏には必ずデメリットが存在する。

契約した人間の命は鬼が管理する。簡単に言えば、鬼は好きなときに契約相手を殺すことができるのだ。

また、契約者がその規約を破つてしまえば、ペナルティーが執行

される。

その内容もバラバラだが、生き残れる可能性は限りなく〇に近い。つまり、契約してしまえば、鬼に殺される未来は確定事項になる。しかし、それがあつても、異能力というものは人間にとつて魅力的であつた。

たとえ、それがどんなに愚かで、馬鹿馬鹿しい選択であつても、だ。

二つ。

鬼の持つ力と科学を合わせることで、今まで実現不可能だつたものを開発することができる。

たとえば、空を飛ぶ車。たとえば、一定の場所から場所まで行き来ができるワープゾーン。科学の飛躍に鬼は役立つという可能性である。

科学者が提示した『鬼の可能性』はこれが全てだ。

最初は馬鹿な話だと人々は罵つたらしい。しかし、鬼のおかげで国が発達し、便利になると、人々の反発は目に見えて消えていった。こうして人間と鬼は切つても切れない関係となる。

しかも、この話はずつと昔の出来事であつた。つまり、何百年もこの国は鬼に怯えながらも、共に歩いてきたことになる。

鬼が人を食うことには変わりはない。それに抵抗しようとしたら鬼と人との間には、絶望的なまでの差があつた。

それに加え、勝手に鬼を退治することは有罪だ。

鬼の殺生は、政府公認の『ジョーカー』と呼ばれる免許を持つ人間しか、できることになつていて。

しかし、いざジョーカーを雇つて鬼を退治してもらおうと思つても、そうスマーズには行かない。依頼料として金が必要になるのだ。貧しい人間には一生かけても出せないだらうほどの、馬鹿げた大金

が。

それほどに鬼退治は危険を伴つ。しかし、だからといって、貧乏人は喰われて死ねというのは、あまりに酷い話だ。

政府もそれを考慮し、この国をぐるりと囲む大きな壁を建てた。鬼は外に生息している。つまり、外からやって来るのだ。その侵入を少しでも拒むために、壁を造つた。

その成果あつてか、鬼の事件はひとまず減少する。しかし、全てが無くなるわけではなかつた。

もともと、鬼が関与する事件は非常に多かつた。それがようやつと少し減つただけで、実際にはあまり違いは無いのだ。

それでも、この国に鬼はどうしても必要な物になつてしまつた。今更そう簡単に切り離すことなどできるわけがない。

(それは、やけに笑える話だ)

旧介は、灰色をした壁を眺めながら、皮肉げに笑つた。見ているだけで苛立たしくなる、そんな笑みだつた。

鬼は敵だ。

にも関わらず、その敵がいなければ、もう人間は生きていけなくなつてしまつた。喰われて、いいように扱われて、殺される。家畜にでもなつた氣になる。いや、実際、家畜と今の人間はそう変わらないのかもしねりない。

ハア、と、息を吐く。

旧介の受けた仕事は、その鬼を殺して欲しいというものだつた。

「鬼退治とか……すげえ久々だな。まあ、金がねえから仕方ないけど。銀貨何枚貰えるつて約束だつたかな」

「確か3枚だつたと思います」

「あー3枚があ。奮発してくれるねえ」

「香富^{こうふ}くんが嬉しそうで私も嬉しいです。といひでまだ出発しないんですか？」

おつとつとした、可愛らしき声だった。そして、旧介が今まで生きてきた中で、一度として聞いたことのない声であった。付け加えるなら、この家に住んでいるのは、旧介と先ほどの大男だけだ。

（は？）

つまり、誰かも分からぬ相手が部屋におり、旧介と呑氣に会話していることになる。

そうして、恐る恐る声のした方向に振り向けば、そこには少女が立っていた。

薄い橙色をした短い髪に、それより濃い色を持つた大きな目。水色をした清楚なワンピースから覗く肌は、透けるように白い。

綺麗な少女だった。

そして、その少女は何故か顔を赤くさせ、唇をだらしなく引き下げていた。

また、吐き出す息も荒く、ハアハアという呼吸の音がはつきりと聞こえる。

言葉は悪いが、変態にしか見えなかつた。

（誰だよ。……何でハアハアいつてんだよ、何を盛り上がってんだよ……）

突然の侵入者に旧介は言葉が出なかつた。というより、この状況で愕然としない人間がいるだろうか。いや、いるわけがない。

何も言えず、ましてや、動くことなど余計にできないまま、旧介は少女を呆然と見つめていた。

そして、その視線に、少女は赤い顔をまた赤くさせる。

(え、なに、こいつ)

正面にいる名も知らぬ少女は、申し訳ないが気持ち悪い存在である。

もとより表情豊かというわけではない旧介は、その感情が表に出なかつたことに小さく安堵した。
しかし、このままでは埒が明かない。旧介は舌を纏れさせながらも、何とか声を吐き出した。

「……お前、なに？ 何で僕の部屋にいるんだ？ というか、銀貨の話をどうして知ってる？」

「ま、待つてください！ 順番に説明します、しますから……あの「なんだよ」

旧介の質問責めに、少女は慌ただしい声を上げた。白く細い指先は力タカタと小さく震えている。また、大きな目は今にも涙が出そうなほど、揺れていた。

その姿は小動物によく似ている。まるで自分が虐めているような錯覚に囚われ、旧介は黙り込んだ。

少女は困惑しているようで、目をあちらこちらに忙しなく動かしている。握り込んだ手を一段と強く握り、少女は目を閉じた。

「落ち着け、落ち着け、大丈夫だから」 そうやって自分自身に言い聞かせるように言葉を繰り返し、少女はとうとう目を開けた。
先程とは打つて変わり、落ち着き払つた眼差しは、どこまでも真っ直ぐに旧介だけを見ている。

少女は大きく息を吸い込み、そして、言葉を吐き出した。

「私、あなたのストーカーです。大好きです。付き合つてください！」

それまでの雰囲気が、ガラガラと音をたてて崩壊していくのを感じながら、旧介は渴いた笑い声を上げた。それしかできなかつた。予想外にも程があるだろう。こちらを幸せそうに見つめる少女に、旧介は笑いかけた。

「黙れ変態」

少女はそれでも微笑んだままであつた。

これは単なる気まぐれでしかない

香宮司 旧介の見た目は平々凡々なものだった。

枯れ草のような、痛んだ薄い金色の長髪を乱雑にゴムで括り、上下ジャージという、どこからどう見てもだらしない姿。

牛乳は嫌いだが、身長は高い。

顔は吊り目と、赤い目が時折相手に悪印象を与える。しかし、好印象を与えたことはない。

つまり、普通の、平均より身長が高く、少しばかり目つきの悪い青年なのだ。

そんな代わり映えのしない男のストーカーをしている少女は、旧介にとつて全く理解不能な存在であった。

そんなストーカー少女は、のほほんと旧介がどうかっこいいのかを、一人で語っている。目を逸らしたくなる光景だった。

しかし、このままでは状況は進展しない。

とりあえず、旧介は少女とできる限りの距離を取ることから始めた。

さすがにストーカーと並んで和気藹々と話せるほど、お気楽な性格はしていない。

部屋の隅に移動した旧介を見ても、少女に気を害した様子はなかった。

「結果的に、お前、何なの？」

「え！ あ……でも、その前にあの」「何？」

嫌な予感がした。

少女はちらちらと旧介を見ては、目を下ろし、見ては、顔を手で

覆い、不審な動作を繰り返す。

何かの儀式かと、馬鹿馬鹿しいことを考えながら、旧介はそれを見ていた。

「」「告白の返事は……」

「却下」

あまりにも早い反応だと、返事を返した旧介自身が驚いた。

「で、ですよね!」

えへ、えへへ、と落胆した様子の少女は、少しばかり氣の毒ではあった。

「まあ、それより、お前は何なんだ? 名前は? まじでストーカーやつてんの?」

旧介の質問に、少女は眉を垂れ下げたまま、それでも、丁寧に答えていった。

少女の返事を要約すると、以下のようになる。

- ・少女の名前は『メイル・エナフィノーラ』といつ。
 - ・旧介に惚れているらしい。
 - ・旧介が好きで仕方ないらしい。
 - ・旧介のためなら何でもできるらしい。
 - ・好きだ惚れただのが含まれた内容は無視することに決める。
- ・旧介のストーカーを始めたのは一年前から。（本当は12月29日11時58分前かららしい。怖い）
- ・鬼退治のことは、たまたま仕掛けた盗聴器で聞いた。銀貨の話もそれで聞いた。

「……分かつてくれましたか？ やつぱり、いきなり香宮司くんに告白するのはやめた方がいいかなって思つたんですけど、あまりに今日の香宮司くんがかっこよくてもう我慢できなくて」

「あー。ちょいストップ」

「あ、はい！ 何ですか？」

ストーカー少女、もとい、メイル・エナフィーラは長々と頼んでもいない独白を即座に切り捨て、旧介の言葉を待つた。もしもメイルに尻尾でも生えていれば、それははち切れんばかりに振られていたのだろう。

旧介はメイルから聞き出したことを纏めたメモを見ながら、鬱々とした気持ちで尋ねる。

「お前、盗聴器仕掛けたのか……？」

問題はやはりこれだろう。

そんなに易々と流せる話ではない。といつよりこれは確実に犯罪だろう。

ストーカーはストーカーでも、末期的なものなのかもしれない。最悪だ。

そんな旧介の内心など何も知らず、メイルは晴れ晴れとした笑みを作り上げ、憎たらしくなるまでに綺麗な声で答えた。

「はい！ 盗聴器だけじゃなくて、一応、盗撮もしてました。でもああいう機械つて難しいですよね……。雑音入っちゃうし。“鬼入り”的やつは高くて買えないし、大好きな香宮司くんのためにならお金なんてどうすことないって思つたんですけど、やつぱり高い力メラは買えなくて……」

「お前に金が無くてとても幸せだよ」

“鬼入り”とは、既製品（例えば、電化製品や自動車など）と、鬼の力を掛け合させて造られたものを指す。

鬼入りの製品は、全ての点において既製のそれよりも上位にあるものだ。

簡単にいうなら、寿命も長く、効率的で、非常に便利な製品だろうか。

ただ、高価な品なので、裕福な人間以外はなかなか手が出せない、というのが唯一のマイナス点もある。

しかし、どうしたものだらうか。

旧介の人生の中で、ストーカーに遭つたなどということは、当然だが無かつた。むしろ、ストーカーに遭うなんて、それだけで貴重な体験だらう。

頭を抱えたくなつた。

室内が冷えた雰囲気に陥つていくのにも、メイルは気付かないようで、何が楽しいのか旧介を見つめ続けている。

「やつぱり……香宮司くんはかつこいいなあ」

不幸にも耳に届いてしまつた、うつとりとした声に、旧介はぞわぞわと背中に悪寒が走るのを感じた。

メイルは旧介を知つてゐるのかもしれない。いや、知つてゐるのだろう。

盗聴盗撮、そして、話には出でないが、尾行だとかそういうこともしていそうだ。さすがに出したゴミ袋を漁るなんてことは、していて欲しくない。聞く勇氣もない。

しかし。しかし、だ。

旧介はメイルのことを全く何も知らない。

20分前にようやく存在を知つたばかりだ。しかも、会つて直ぐ

のストーカー宣言。一年間も続けていたというおまけ付きだ。

クリーリング・オフ機能は無いのだろうか。

そこまで考えて、旧介はある違和感にたどり着いた。いや、違和感という程でも無いのやもしれない。

「お前や」

「は、はい！ 何ですか！」

素早い反応に苦笑いがもれる。

外見は可愛らしげのに、中身はどうしても残念なのだらう。神様とやうは、時に酷いことをするものだ。

「何で僕が好きなんだ？ デリしてストーカーなんてしようと思つた？」

「え、あ、あの……そ、それは……」

違和感はこれだつた。

メールに惚れられ、ましてやストーカーに発展させるよつた、そんな何かを旧介は持つていてない。

これ程にメールが旧介に心酔する理由が無いことに、違和感を感じたのだ。

とは言え、もともとメールのことは全く理解できない。なので、その理由を聞いても、納得できるか微妙なところだつた。

メールを見る。

またその顔が赤くなる。これ以上赤くなつたら、茹鰯になつてしまつやもしれない。

まあ、メールの赤面する気持ちが分からぬわけではない。

『どうして僕が好きなのか』という問い合わせるために、告白まがいのことを言わねばならなくなる。いや、『まがい』でもなく、告白になるだらう。

しかし、出会った瞬間『ストーカー宣言 + 付き合ってください』と高らかに叫んだので、そういう羞恥はてつくりメイルには無いのかとばかり思っていた。

どうやらそれは外れであるらしい。

「あ、あの……それは、こ、香宮司くんが」

「僕が？」

「香宮司くんが……」

「ああ」

沈黙。

しかし、先程までの冷え冷えとした雰囲気とは違つ、まだ居心地のよいそれであつた。

メイルは耳まで赤くさせている。年下は好みではない旧介も、ふるふると震える小動物のような姿には、少しばかりぐっと来るものがあつた。

しかし、それでも、悲しいことにメイルはストーカーだ。

とうとう覚悟ができたらしく、メイルは唇をゆっくりと開いた。旧介はその言葉を、ただ待つていた。

「……あの時、香宮司くんが私を」

「大将！ アンタ、本当にいつ仕事行くんですか！ 依頼人が怒つたらお金貰えないじゃないすか！ お金様が！」

今までの空氣を全て破壊した、坊主頭の男は即座に、『自分がとんでもない状況で部屋に入つてしまつた』ことに気付いた。気付いたが、旧介と距離を置いて座る、見たことのない可憐な少女を見て、思考が停止する。

黙つていればよかつたのだ。黙つて、部屋から何事もなかつたよ

うに退出すれば、それでよかつた。

しかし、男は言わずにいられない。

「可愛い女の子を部屋に連れ込んで、なに自分だけいいことしようとしてんすかああ！ 死ぬほど羨ましい！ ちょっと私も紹介し、

」

全て言い終える前に、男の顔面に旧介の拳がめり込んだ。

場所は旧介の部屋から、居間に移る。

小さなちゃぶ台を囲むように、大男、ジャージ男、そしてストーカー少女が座つている。

見るからに異様なメンバーであつた。しかし、その雰囲気は非常に明るい。

「うんすか～、私アてつきり大将が彼女でも作つたんだとばかり」

「か、かか、彼女なんてそそそんな！ いつかなりたいです！」

「その未来は来ねえから安心しろ」

「大将、アンタ辛辣すぎません？ こんな可愛い子に……」

大男からの非難を軽く無視し、ジャージ男、もとい旧介はメイルをちらりと盗み見る。

出さなくてもいい、といふか出すな。そう言つたにも関わらず、でへでへと鼻の下を伸ばしながら、大男が入れた茶を、メイルは幸福そうに飲んでいた。

大男の名は、「ガリル」という。旧介とは長い付き合いで、この家では家事全般を担当している。好きなものは金と女。何しろ、ガリル自身が酷い強面なので、近寄つて来る女性は少ない。

そんなガリルにとって、外見も文句なしで普通に会話できるメイルは、貴重だということもよく分かる。百歩譲つて、媚びべつらつているのも許そう。

しかし、天変地異が起ころうが、その少女がストーカーであることに変わりはない。むしろ犯罪者予備軍でもある。

そんな相手と何が嬉しくて茶を飲まねばならないのか。

全く面倒臭いことになった。

「お前、メイルだけ」
「は、はい！」

今まで飲んでいた茶を机にたたき付ける勢いで、メイルは声を裏返せながら返事をする。

どうやら名前を呼んで貰えたことが嬉しかったらしい。
本当に犬だなど、半ば呆れつつ、旧介はずつと思つていたことを告げる。

「お前、いつ出でいくの」
「は？！ 大将、嘘でしょ？ こんなに可愛い女の子になんてことを言つて」
「ハゲは黙つとけ」

『あやあやあと抗議の声を上げるガリルを睨みつけ。瞬間、ガリルは口を閉じた。

可愛い女の子と旧介を秤にかけた結果、後者に従つ方が賢明だと判断したらしい。賢い選択だ。

黙り込んだメイルを見る。名前を呼ばれた時の嬉しさはどこに消

えたのか、悲しそうに唇を噛んでいた。

しかし、それでも容赦はしない。

始まりからおかしかったのだ。今のメイルは、この家の異端でしかない。ここにいるべきではない人間だ。

ただ、一つ心残りがあるとすると、メイルの言いかけたあの言葉の続きをだつた。

確かに、メイルは『あの時』と言つていた。過去の話なのだろう。『あの時』がいつを指すか、さすがに正確には分からぬが。これはあくまで旧介の予想だ。答えはメイルしか知らないのだから、その予測の正当性は分からぬ。

旧介はメイルに会つたことがあるのかも知れない。

メイルはこう言つた。「あの時、香富司くんが私を」ここまでしか聞き取ることはできなかつたが、これがどう続くのであれ、会つていなければ何が続いても難しいように思える。

まあ、いくら考えたところで、答えは出ないのだが。

「……そう、ですよね」

その暗い声に、それまでの思考が搔き消される。

メイルの顔は酷い有様だつた。あんなにころころと変わつていた表情は、どこに行つてしまつたのか、笑みを保つのがやつとの渴いたそれ。見ているだけで、氣の毒になるほどだつた。

それでも、旧介は何も言わなかつた。

「出でいきます。」じめんなさい。非常識でしたよね。いきなりだし

……

「本当に」

同意の声を示した旧介に、責めるようにガリルが視線を送る。しかし、旧介はそれを気にもせず、ただ真つ直ぐにメイルを見て

いた。

顔を青白くさせたメイルは、それでも笑みだけは保っている。痛々しい表情だった。

メイルはゆっくりと立ち上がる。ふらふらと身体が不安定なのは、精神的なショックからだろうか。

ガリルの玄関まで案内するという提案を、柔らかく断る。ストーカーなので、家の間取りは分かっているのだろう。断られても、しつこく食い下がるガリルと断るメイルの押し問答をぼんやり眺める。

薄い橙色の髪が力無く揺れていた。

それは、あの光景にどこか似ている。

旧介の世界が終わつたあの日。彼女の皮を被つたあの化け物も、髪を揺らして笑っていた。

そこで初めて気付かされる。

メイルは彼女に似ていた。むしろ、どうして今まで気付かなかつたのか。髪の色も笑い方も声も全てが全て、あまりにも彼女に似過ぎているというのに。

記憶を封印していたのかもしれないなど、旧介は自分自身を嘲笑せずにはいられなかつた。これは逃避でしかない。

「本当に大丈夫ですから。優しくしてくださつて、ありがとうございます」お茶、美味しかつたです

「……そつですかア」

ようやくあちらの話し合いは済んだらしく、諦めたガリルと微笑みを絶やさないメイルがいた。

メイルは一度こちらを見た。怒られた子供のような目をしている。小さくお辞儀をしてから、口だけが「ありがとうございました」

と動く。

「おい」

旧介の声に、メイルは肩を大きく跳ねさせた。また何か言われるのかかもしれない、少し怯えの混じった大きな目が、それでも嬉しそうにこちらを見る。

「お前……いや、メイル。このあと、暇なのか？」

「……え？」

「暇なのか、暇じゃねえのか、どっちだ」

メイルもガリルも、同じ顔をしていた。驚愕だ。

先程まではあれだけ出ていけ出ていけと口うるさく言っていた旧介が、突然こんなことを聞いたのだ。驚くのが普通だらう。果然としたままメイルは、旧介が言つた言葉を、聞き直すように繰り返した。

そして、笑う。満面の笑みだった。

「ひ、暇です！ 暇すぎて本当にいろいろとあの大変なくらい暇で……」

「今からさ、鬼さんぶつ殺しに行くんだよな。一人もなんかあれだし、来るか？」

「いいいい行きます！」

旧介はメイルに笑いかけた。

「じゃあ用意してこい。あとで家の前で集合な」

「はひー！」

思いつたり舌を噛んだらしく、手で口を抑えながらも、メールはすごい速さで走り去った。

今から家に帰つて用意を整えるのだろう。

ああ。それにしても似ているようで、似ていない。似ていないようで、似ている。

メールには酷なことをしているのだろう。

それでも、旧介の気まぐれな選択は変わらなかつた。

約束ですよ？

広がる青空の真下に、灰色のトンネルがある。

一見、鉄で造られたように見えるそれは、鉄であつて鉄でない物から出来ていた。

鬼入りの鉄。それと特殊な人工知能を持つ機械。これらは、科学と鬼の融合により新しく造られ、時代を一気に発展させた新しい科学だ。

そしてこのトンネルはそれをふんだんに使つた、最新型のワープゾーンであつた。

とはいゝ、歩行型と呼ばれるこの機種は、移動する人間も共に動かねば作動しない。短時間で田当ての地に行くことは可能だが、ハイテクな機械というより、ただ単に少し長いトンネルを歩いているようにしか思えないのが、少しばかり間抜けな点である。

トンネルの中は、一言で言うなら白い。とにかく白い。

清潔感を出すために白い壁にしたらしいが、逆にどこまでも黒つても白ばかりが目に入る光景は不気味にさえ思われる。

そんな白の中を、田介とメイルは歩いていた。

二人の手にはペラペラとした薄い紙が握られている。青い背景に、赤い文字という田に悪い色彩が並べられたそれは、このワープゾーンのチケットだった。

「便利になりましたよね。ワープゾーン一回につき銅貨5枚だなんて」

「いつそ便利にするくらいなら、歩かなくてもいいヤツ作ればよかつたのにな」

「え？ でも番富司くんは歩くの好きですよね？」

黄色いショルダーバッグを肩からぶら下げながら、メイルは質問ではなく確認のための言葉を吐き出した。

メイルはストーカーだ。一年という保証付きの、裁判なら有罪になつてもおかしくない程に酷いストーカーだ。
もしかすると、旧介よりも旧介を知り尽くしているかもしれない。
だからこそその確認。なぜなら、彼女は『旧介は歩くのが好き』といふ事実を知つていてるからだ。

「……何でそう思うんだ」

「香富司くん、いつも朝6時に軽いウォーキングをしてるじゃないですか。だから歩くの好きなんだなって」

たしかに、旧介は毎朝6時に軽いウォーキングをしている。朝だと頭が上手く働かないことに加え、もとより歩くことが好きだからだ。

初対面の相手が自分のことを何でも知つている、ところはやはり気持ちが良くな。

「お前や」

「はい！」

「そうやって普通にストーカー知識を話すな。引くから」

「え……あ、う、じめんなさい……そうですね。普通は引きますよね」

「分かつたならいいけどさ」

ひたすら続く白を眺めながら、旧介はできるだけ厳しい聲音にならないよう注意していた。

メイルは本当に表情豊かな少女だ。落ち込んだかと思えば、次の瞬間にはすでに笑っている。

特に旧介からの言葉には敏感で、何氣ない一言に涙目にまでなつて

しまつのだからいただけない。

(振り回されてるなア)

身長差がなかなかあるため、旧介はメールを見下ろすことになる。ふわふわと羽の様に揺れる髪の毛が視界にちらちらと映り込んで消えるのを繰り返す。

「……にしても」

「どうしたんですか?」

「よく付いて来ようと思つたよな、お前。いや、誘つたのは僕だけど」

仮にも、鬼退治だ。話しか聞いていないので、鬼がどれだけ強いのかも分からぬ。

はつきり言って、とても危険な仕事なのだ。
それに、特技がストーカーの少女をホイホイ連れて来てしまってよかつたのだろうか。旧介は早くも後悔していた。

家から出る際、ガリルに何度も言われた言葉を思い出す。
ガリルは鬼退治にメールを連れていくことに反対していた。

当然の反応だろう。

死ぬ可能性さえあるそれに、ストーカーである反面、可愛らしい少女のメールをお供にするのは決して良い判断ではない。
それでも何故か、旧介はメールを連れて行こうと思つたのだ。気まぐれにしては、頑固な気まぐれであるが。

「まあ、鬼退治ここまで連れていくなんて馬鹿なことしねえけどさア。
どつかの宿借りて、そこで待つてくれりやあ良いんだけど。それでもやつぱり危険なのは危険だろうし。悪いときには、死ぬかもし

れねえのに

「……付いて行きますよ?」

「は?」

迷いのない、冷静な声が鼓膜を揺らす。

唐突にメイルが旧介の横から正面に動いた。呆然と動き回る小さな少女を見つめていれば、メイルは橙色の目を旧介に向ける。どこまでも深く、引き込まれそうな橙色だった。

「私は香富司くんから離れません。鬼を退治する時も付いて行きます。私が足手まといだと思つたら捨ててください。私を盾に使えそうなら、利用してください」

「死にたいのか?」

「ち、違いますよ!」でも香富司くんの邪魔になるのは嫌だし……。それに香富司くんに利用して貰えるなら嬉しいです。その結果たとえ死ぬことがあつても、私は笑えます」

メイルの頭はおかしいのだと、旧介はそう思つた。

薄々気付いてはいたが、メイルの価値観と旧介のそれはあまりに違います。

メイルが旧介を好きだとして、死ねるものだろうか? そんなに簡単に、微笑みを携えたまま話せるようなものなのか?

普通は違う。違うに決まっている。

メイルは異常だ。

「あ……でも」

「なに?」

「わ、我が儘なお願いなんですが」

そう言つて、メイルは唇を噛んだ。言つてこいものか悩んでいる

らしい。

旧介は特に急かすことはせず、田の前の少女を見ていた。
異端で歪みに歪みきった、頭のおかしいストーカー。
笑える程に、酷い存在だ。

「駄目ならいいんです、いいんですけど

「ああ」

恥ずかしげに旧介を上目遣いで見てから、メイルはおそるおそる口を開いた。

「もしも私が死ぬようなことがあつたら、その時は香園司くんが私を看取つてください」

異常者のその願いを聞いても、旧介は何も言い返せなかつた。
意味が分からなかつた。

いや、意味は分かる。死ぬ時に傍に居てほしいといつてだらう。
ただ、それを言ひ意味が分からない。

(「コイツ連れて来ねえ方がまじでよかつたかも）

理解の範囲外にいるメイルは、旧介にとつて宇宙人のよつなものがつた。言葉も思考も種類も全てが違う。だから理解できなくとも許される。

しかし、メイルは人間だ。言葉も通じるし、種族だつて同じである。

違うのは生き方だけだ。それが決定的に違うすぎる。

(……もうこいや）

そして、旧介はメールを理解することを諦めた。

「分かった分かった死ぬ時は見ててやるよ。サービスで頭も撫でてやる」

「うえ？！ ほほ、本当ですかーえつええ……」

「キモい。騒ぐな

「す、すみません」

メールの口元はだらしなくにやけている。

頭を撫でるといつ、それだけのことでこんなに喜べるのは、純粋にすごいことだらう。

この話をいい加減に切り上げるため、旧介は止めていた足をまた動かし始めた。

向かい側にいるメールを押しのけ、また長い白を進む。

置いていかれるのを恐れたのか、直ぐにメールが隣に並んでいた。

「……約束ですよ
「分かつたって。違う話しin」

些か乱暴に旧介が要求した話題の変更にも、メールは文句を言わなかつた。

（従順なのが、そうじゃないのかよく分かんない奴だな）

「じゃあ、ううん……。あ、そつこねば、番富司くんつて、ジョーカーじゃないですよね？」

「ん？ ああ、そつだな」

ジョーカーとは、鬼を退治する人間が持つ政府公認の許可証だ。

時に、その許可証を持つ人間をそのままジョーカーと呼ぶこともあ

る。

ジョーカーでない人間が、鬼を退治することは犯罪だ。

「……え、だ、大丈夫なんですか？ 鬼退治に行くんですね？」
「大丈夫、依頼人もその点については了承してる」
「そういうことじやなくつて、……犯罪ですよ？」
「ストーカーが何を言つてんだ？」

その日旧介が発した声の中で、一番、冷めた低い音だった。
さすがのメイルも、小さな肩を揺らして怯えた表情をしている。
旧介は普通の青年である。
ただ人より高い身長と、鋭い赤目のせいで、威圧感は有り余る程
にあつた。

「え……で、でも、じゃあ」

メイルの声は震えている。さすがに言い過ぎたかもしれない。
メイルがストーカーなのは何よりの事実ではあるが。
気まずい空氣に、旧介は枯れ草色をした長い髪を、落ち着きなく
弄りだした。

それは、困つたときや考え方をするときの旧介の癖である。

（面倒臭え、びびるなよ。本当のことだり）

トンネルの出口が見えはじめた。やけに長い時間だつたように思
えるが、実際は10分も経っていない。

本来、依頼人のいる場所に行くためには三日かかる。それを10
分歩くだけで行き着くことができるのだから、ワープゾーンもなか
なかに侮れない。

しかし、今の旧介にそんな些細なことはビリでもいい。

トンネルを抜けた後も、こんなに気まずい雰囲気なのだろうか。

それはあまりに苦痛だ。

隣の橙色をした頭を盗み見る。

だが、旧介とほぼ同時に、メイルも顔を上げていた。含むさる視線。

「……おい、いつまでも」

「じゃあ私たちお揃いですね！」

「うじうじするなよ。旧介なりの気遣いの言葉は、甲高い少女の声に見事に搔き消された。

「は？」

「だつて、ストーカーの私と、ジヨーカーじゃないけど仕事を受けている香富司くん。どちらも犯罪者ですよ。あ、まだ予備軍になるのかな」

「は？」

トンネルの出口にたどり着く。よしやく目的地に着いた喜びを噛み締める前に、旧介は硬直していた。

「わ、私たち、運命の赤い糸で繋がってるのかも……」

えへへと特有の笑い声を上げたメイルを見ながら、旧介は思い知つていた。

理解できるとかできないとか、そういう問題ではないと。

思わず、目の前の少女に「お前宇宙人だろ?」と聞いてしまってなるのを、旧介は必死で堪えていた。

初めてにして依頼主をとことこひは

「い、依頼主さんはやけに辺鄙なところに住んでるんですね？」
「そうでもねえと思うけどな。僕の家の周りだってこんなもんだろ
「こんなに酷くは無い」と思いますよ……」

旧介とメイルは森の中に居た。

トンネルから出た後、目的地の途中にある小さな町で宿を借り、そこに邪魔になりそうな荷物を全て置いてきた。

なので、今の旧介もメイルもとても身軽な状態にある。
目的地までの地図を片手に持ちながら、旧介は歩きにくく木々の中を、樂々と通り抜けた。

時刻は昼。昼食は宿で取つてきただために、空腹感は感じない。

「あとどれくらいで着く予定なのか、教えてくれませんか?」

朝やトンネルの中で聞いたものより、幾分かトーンの落ちた声に、
旧介は後ろを振り返る。

髪の毛に葉っぱや蜘蛛の巣を絡め、激しい運動のせいか息を荒げ、それでも懸命に歩き続けるメイルがそこに居た。

旧介にしてみれば、どうということはない道であつても、女性であるメイルにこの場所はなかなか過酷なようである。

(それでも、頑張ってる方ではあるんだけどなア……)

ストーカーだったからか、それとも基より体力はあったのか、そちらの女性よりは体力もあるし、運動神経も申し分ない。それに加え、メイルの凄い所は弱音を吐かないことだろう。

かれこれ、道とも呼べない森の中を2時間は歩いている。正確な時間は計っていないので、それ以上といふこともあるかもしない。その間、メールは一度として弱音を言わなかつた。疲れは確実に溜まつてゐるだろうに、旧介に遅れを取ることさえ無かつたのである。

根性があるのか、はたまた我慢強いだけなのか、旧介には判別できない。だが、うだうだと弱音を吐く意氣地無しが同伴であつた場合を考えれば、メールの強さはとても幸運なことだらう。

「あと少しで着く。……しんどいなら、一旦休憩するか？」

「いえ、大丈夫です！ これくらい全然へっちゃらです」

「我慢強いのはいいことだけどさ、それで後々ぶつ倒れるようなどがあると困るんだよな」

「大丈夫です！ 心配して、くれてるんですね？ 幸せです。香

宮司くんをもつと好きになっちゃいそうですね？……」

「ああそう」

今度は別の意味で頬を赤らめ、口元をだらしなく下げるメールに、旧介は分かりやすく眉を歪めた。

心配をしたわけではなく、本当に倒れられると迷惑なのでそう言つたのだが、これだけの軽口で返せるなら大丈夫なのだろう。

旧介は、止めていた足を再び動かし始めた。

何故、依頼人の家がこれ程に到達しにくい場所にあるのか。その答えはとても簡単だ。

鬼に狙われている人間は、総じて“鬼憑き”と呼ばれている。そして、鬼憑きになつた人間が何より恐れるべき相手は鬼ではない。周りの人間たちである。

あまりにも皮肉な話だ。だが、それはある意味当然のことでもあるのだろう。

“鬼憑き”に人を襲う気が無かつたとしても、周りの人々はそれをやすやすと信じるだろうか？受け入れるだろうか？

そんなわけがない。

鬼は人を食い殺す化け物だ。

それに憑かれた人間はもはや人間ではなく、化け物同然だと人々はそう考える。仕方がないことだ。なぜなら人々にとつて、鬼は恐怖の対象でしかないのだから。

そうした環境で“鬼憑き”は虐げられ、忌避され、迫害を受けることになる。最悪、鬼では無いにも関わらず、『鬼退治』として殺されることもある。

だから、鬼憑き達は人から隠れるために森や山に逃げ込む。そうする以外に、自身を守る術が無いからだ。

「あ、香富司くん。もしかして、あの小屋が目的地ですか？」

「ん？ ああ、あれだな」

今回の依頼人もその例外ではなく、こんな人里離れた森の奥に住んでいるのだろう。

メイルの指差した方向を見れば、薄汚れた小屋がぽつんと寂しげに建っている。地面は湿り気を帯び、蔓延る木々のせいで太陽の光は注がれない、暗い場所であった。

小屋との距離を狭めながら、旧介は隣に並んだメイルを見ることもなく、口を開いた。

「お前さ、分かってるとは思うんだけど

「何ですか？」

「僕と依頼人が話してる時に、変な口出しは絶対にするな。黙つて後ろで見ておけ。ただ、もしも気になることがあれば、それは僕と二人だけになつてから言え。いいな？」

「はい！頑張つて黙りますね」

黙ることに、頑張るも頑張らないも無いだろう。思わずそう突っ込んでしまってそうになるのを、旧介は何とか堪えた。

なぜなら、黙れだの何だのという明らかに酷い命令を言われたにも関わらず、メイルがやけにそれに意気込んでいるからだ。

「必ず任務を遂行させてみせます！ 期待しててくださいね」「……ああ、期待しとく」

旧介は、棒読みでそう答えた。そう言つて何ができるのだろう。黙るなんてやううと思えば、子供にもできることだ。

それをどうしてこうも重大任務を背負つた期待の星みたいな顔をするのか。

とはいへ、命令に従わないよりは確実にいい反応だといふことも事実ではある。

（扱い方がよく分からねえな、コイツ……。ストーカーをつまみ扱う10の方法とかいうマニュアルあつたらいいんだけど）

メイルの明るい雰囲気に呑まれ、馬鹿馬鹿しいことを真剣に考えながら、旧介はゆっくりと足を止めた。

目前に立ちはだかるは件の小屋である。

遠くから見ていて気付かなかつたが、壁は腐りかけの木でできており、穴や傷などがそこかしこにあつた。腐りかけの木はともかく、穴や傷は見ている限り人為的なものである。

やはり、迫害されているのだろう。

依頼人も、好んでこんな場所に住んでいるわけではあるまい。もともと住んでいた場所は、旧介とメイルが宿を借りた町辺りやもしれない。あれ以外、ここに町は無いからだ。

旧介はメールを一瞥してから、ぼろぼろになつた扉を叩いた。それだけの振動で悲鳴を上げて軋むのだから、もうこの小屋はそう永くないのだろう。

「……はい？」

「初めまして。今回、“鬼退治”を依頼して頂いた者です」

扉から、警戒心を丸出しにしながら出て来たのは背の高い女性であつた。

すらりとした長い手足と、艶のある真っ直ぐな長い茶髪。鋭い目の中には、ありありと隈が存在を主張している。服もみすぼらしいものであり、彼女が苦しい生活をしていることは一目で分かつた。

鬼退治。

その言葉を聞いた瞬間に、女の表情が一変する。それは、地獄でよつやく救いの光を見た人間のそれに似ていた。

がしりと、唐突に、女は旧介の肩を掴んだ。爪がジャージを通して皮膚に食い込みそうなほど力に、旧介の眉間に僅かばかりの皺が寄る。

「お、お、遅いんだよお……！　あ、あたしが、ど、どれだけお前を待つてたか、分かる？　こんな気味悪いとこで暮らしてさ、惨めにも程があるだろう！　早くあの化け物を殺してよつ！」

「落ち着いてください。それに、退治するかまだ決まつたわけじゃありません」

「……は？」

髪の毛を振り乱して悲痛な叫び声を上げていた女は、旧介の声に動きを止めた。

信じられないといつぱりに、限界まで見開かれた目。

旧介は肩を掴む手を、できるだけ優しく払い落とした。

「退治してくれないの……？」

「いや、言い方が悪かつた」

弱々しく震える声に、旧介は即座に返事を返した。

「……とりあえず、話の続きを室内でしませんか？」「こんなところで話すようなものでもないの？」

旧介の言葉に、女はゆっくりと頷く。

無言で扉を開けたまま、小屋の中へ進む女の後に続く形で、旧介とメイルも足を踏み入れた。

室内は予想以上に酷い有様だ。穴の空いた屋根から侵入するように木々が生え、床は歩くたびにぎしづと悲鳴をあげる。

もはや家と呼んでいいかも分からぬ状態である。

旧介の後ろを付いて歩くメイルも、その光景には驚きを隠せなかつたらしく、目を見開きそこらを見回している。口を手で覆つているのは、旧介の命令を忠実にこなしているからだらう。

女は旧介とメイルに、椅子に座るよつてから、自身も向かいに腰を下ろした。

少し時間が経つたことで落ち着きを取り戻したらしく、女は「さつきばごめん」と恥ずかしそうに呟いた。

「あたし、本当に嬉しくってさ。これでこんなとこからおひざで起きると思うと、もう、なんか止まんなくって」

「慣れてるので大丈夫ですよ」

少ないながらも、旧介は鬼退治を何度もかしたことがある。その際、鬼憑きである依頼人たちは全員が冷静さを忘れていた。

彼らにとつて、旧介はようやく現れた救世主であるのだろう。だから必死で助けを求めるのだ。

助かりたい人間が依頼主になるのは、必然のことだらう。

「……そ、それで。鬼を退治しないかもつてどうこう」と、金はあるんだよ。約束は破らないさ」

「金銭の問題ではなく、僕の問題です」
「は？」

女が身を乗り出す勢いで、旧介を凝視する。強い視線から逃げることもなく、淡々と旧介は続けた。

「まずもつて貴方を狙う鬼を見る必要があります。僕は今まで人を食べる鬼の退治しかしたことがありません。ですが、もし、貴方を狙う鬼が高い知能を持つとされる契約を誘うタイプであるなら、殺されるのは僕になるかもしねない」

「つ、つまり、お前が鬼に敵わないかもつてこと？」

「まあ、そうですね。了承して頂いていますが、僕はジョーカーじゃない。ただの人間です。僕が勝てないと判断した場合、鬼退治を引き受けることはできません。意味ないですから」

「……そんな」

絶望に顔を青くさせた女を見ながら、旧介は沈黙していた。言わねばならないことは全て言つた。

旧介は馬鹿ではない。勝てないと分かつた相手に、わざわざ死ぬと分かりながらも戦いを挑むほど熱い性格もしていない。だからこそその言葉である。

（まあ、今までの鬼退治は結構楽に倒せたんだけどなア。全部人喰いのやつで、契約したがるのじゃなかつたからだろうけど）

女は顔を俯かせ、身体をがくがくと震わせていた。頼みの綱にもしかすれば見捨てられるかもしれない。考えたくもない可能性に、怯えているのだろう。

旧介は無表情に女が何か言つのを待つていた。

そして。

その女を見る者がもう一人居た。

メイルである。

メイルは口をしつかりと結んだまま、可笑しいものを見るような目で、女を見ていた。

その表情に悪意は無い。ただ純粋にどこまでも不思議で仕方がない。そんな顔である。

旧介は、メイルの僅かな変化に気付くことはなかつた。

「幸せな時間を堪能しています

「……分かった。それでもいい。ただできるだけ、鬼退治をしてほしいんだ。あたしはまだ死にたくない」

「了解しました」

女は暗い面持ちをしたまま、それでもしつかりとそう言った。
確かに、旧介とてできる限りのことはするつもりだ。今回の仕事をしなかつた場合、当然ながら報酬も無しになる。それだけはどうしても避けたい、というのが本音であった。

依頼人の名前は、エミア・ロルドという。

エミアは何とか明るく振る舞おうとしているようだ、口元に笑みを貼付けている。とはいえ、それは見ただけで作り物と分かるものであつたが。

「あと、エミアさんは、どういう鬼に狙われているのか分かりますか？」契約を勧めてきたとか、そういう感じで「

「……契約、なあ。あたしは勧められてないよ。鬼に襲われそうになつたことはあるけど」

「そうですか」

情報があまりに少なすぎる。

それが何よりの問題であった。

契約をしたがる鬼であれ、人を食い殺す鬼であれ、見た目は全く変わらないし、どちらも人を襲う化け物であるのだ。

この時点では、エミアに憑いている鬼がどちらのタイプであるか、予想もできない。

「では、鬼について気付いたことはありませんか？何でもいいので」「気付いたこと、なあ……」

椅子に深くもたれ掛かり、頭を搔きながら、エミアは眉を歪めた。鬼を見た時のことを思い出しているのだろう。あまり思い出したくはない記憶かもしけないが、如何せんヒントが少なすぎる。

ちらりと、隣で静かにしているメイルを見る。その視線に気付いたのか、メイルも旧介の方へ目を向けた。

僅かの時間、見つめ合うことになる。

メイルは唇を笑みの形に変えた。にこり。音にするなら、それだろうか。嬉しさを隠しきれずに、思わず溢れ出てしまった、そんな笑みであった。

「あ、そ、そういうば」「何か思い出しましたか？」

エミアの女性にしては低い声が鼓膜を揺らす。
メイルから顔を逸らし、旧介は頭を抱えている依頼主に向き直つた。

「血まみれだつたんだ、あ、あの鬼……」「血まみれ、といつと？」「うまくはわかんないよ！　でも、人を喰つた後だつたのかも……」
「ほつ」

違和感。
小さな違和感を抱きながら、あえて旧介はそれを口にはしなかつた。

表情も一切変わらない。

無感情を装つたまま、旧介はポケットからメモ帳とボールペンを取り出した。

血まみれの鬼

それだけを素早く書いてから、またエニアを見る。

「あと気が付いたことは?」

「……も、うな、いよ。あるかも、しん、なこ、けど、や、頭が、ぐ、う、や、ぐ、う、や、で、い、ま、く、覚えて、ない、ん、だ。思、こ、思、こ、した、り、ま、た、言、う、つ、よ、」

分かりました

メモ帳とボールペンをポケットにしまい込みながら、旧介は席から立ち上がる。それにつけられ、メールも同様に席を立つた。

「じゃあ、また明日の」の時間に来ますね」「は? -」

何でもない」とのようしゃれいつてのけた田介に、驚いたのはヒリアである。

当然だ。

人々に迫害を受け、こんな辺境の地に追いやられた。あまりに絶望的な状況の中、ようやく現れた救世主が、何もしないで帰ると言つていいのだから。

むしろ、これで驚かすにいられる人間の方が希少だろう。

「何で帰るんだよ！……まさか、あたしの鬼はやつぱり倒せないつ

て」と?

「違いますよ。ただ」

た
た
?

ヒミアが旧介に近寄り、間近で睨みつけるようにその顔を凝視する。

吐息がかかるほどの距離に、旧介は不愉快そうに手を細めた。それでもエミアは退こうとはしない。

旧介の腕を両手で握りしめ、後退することさえ許さないが、つた。

「香宮司くん……」

その傍で、メイルが不安げに一人を見ている。

そして、いつの間にか、メイルは旧介のジャージの裾を握つっていた。

状況を知らない人間がその場面を見れば、一人の女が、無駄に背の高い男を取り合っているようにしか見えないだろう。

しかし、事態はそれ程軽いものではない。

そして。

膠着した状況を始めて抜けたのは、旧介であった。ハアとわざとらしいため息を落としてから、目前で、親の仇でも見るかのような顔をしているヒミアを見下ろす。

「宿」

「やど？」

短い単語に、ヒミアが首を傾げた。

そのせいで、また余計に狭まる距離に旧介が口を曲げる。

「近い」

「え、あ、あつ」

瞬間、Hミニアが旧介を容赦なく突き飛ばした。

受け身も何もしていない状態であつたために、旧介はぐらつと後方に倒れそうになる。

しかし、それを見たメイルが驚くべき早さで、旧介をがしりと抱き留めた。

自身より30cmは大きい男を、しかも少女が抱き留めるのはなかなかに困難なものだらう。それでも、メイルは旧介に回した手を離そうとはせず、その小さな身体で必死に踏ん張つた。

「うぐ！」

人形のよう身を任せていた旧介も、ボロボロの床に足を留め、体勢を取り直す。

その顔は、隠す気もないのか、たいそう不満げに歪められている。それを見て、顔を真つ赤にさせながらも、Hミニアはすぐに口を開いた。

「うーうーめん！ あたし、なんか白熱しちゃうと無意識に近付いちやう癖があるんだつ」

「いいんですけどね」

全くいことは思つていない、刺々しい口調で言い返す旧介に、Hミニアは顔を青くさせた。

「本当にうめん。あ、あんまりに近くで、自分でもびっくりしちゃつて」

「へえ」

「や、やつこねばとー、やびつてびつこつ」と。

気まずい雰囲気に耐え切れず、Hミニアが話題を変える。

だが、旧介もそれに乗らない程、苛立つたわけでもなく、「ああ」と頷いた。

「宿借りてるんですよ、町で。だから帰らないといけなくて」

本当は宿のサービスで付いている晩御飯を食べたいだけなのだが、当然ながらそれは言わない。

（タダだし。美味しいし。食わないとあまりに損すぎるだろ）

しかし、そんな雰囲気はおぐびにも出たず、旧介はあたかも宿に帰る必要があるという態度を取っている。

「え、でも、じゃ、じゃあ……今晚あたし一人？」
「嫌でしたらまた夜に来ますよ」
「や、やつぱり」

Hミアは言ひにくそうに口を引き結んでから、旧介を上田遣いに見つめた。

また、違和感。

「IJの小屋に今日は泊まってくれよー。」「……は？」

予想もしていなかつた言葉に、旧介の目が僅かばかりに見開かれ
る。

だが、Hミアはそんな旧介にも気付かず、妙案を思い付いたとい
うように腕を組んだ。

「そうだよー。だったら、いつ鬼が出ても倒して貰えるし

「いや、まだ鬼退治をするとは言ひてないですよ。
「じゃあ鬼をそこで見極めればいいじゃないか！ 我ながらいい案
だよ」

（いい案だよ、じゃねえよ。最悪な案だよ）

「歩譲つて、ここに泊まることがある。」

その場合のメリットは、鬼退治がしやすい。
そしてデメリットは、宿の美味しい食事を諦めねばならない。また、言つては悪いが、こんな古びた薄汚い小屋で寝る必要がある。
どう考へても、確実にデメリットの方が多すぎるのである。

「待つてください。やつぱり駄目です」

「え？ なんで？」

「宿に帰らないといけない気がしますから」

「報酬アップをせむからー！」

報酬。

その単語が耳に入るやいなや、旧介はヒニアに微笑みかけた。

「そうですね。危険ですし、ここに泊まらせて頂きましょうか

「お前、現金な奴だね！ そういうとこ素敵だと想つわ」

ヒニアが面白がり口にした感想も、旧介には聞こえていない。
金を貰えるならば、だいたいの仕事はやる。
それは旧介の中での絶対であった。

「……と、言いましたが」

「お前さ、敬語やめてよ。なんかす」こ嫌だ」

Hミアの言葉にも、旧介は反抗する気さえ起きない。
金。その単語で旧介の頭は埋め尽くされているからだ。

「と、言つたが。どこに泊まるんだ？ 一人も寝ることができるそ
なスペースは見受けられねえけど」

「ああ。それは、あっちの部屋にあるんだよ」

今まで気付かなかつたが、Hミアの指した方向には一つの扉があ
つた。

Hミアが扉を開くと、中はお世辞にも広いとは言えないが、寝る
ことはできるだらうスペースがある。窓が一つもないことから、物
置か何かなのかもしねり。

とはいえ、これでは一人しか寝ることはできないだらう。

「あと一人はどこに寝るんだ？」

「え？ 一人で寝て貰つみよ？」

「は？」

信じられない言葉に、思わず耳を疑つ。隣に立つHミアを見れば、
何が可笑しいのか分からぬといつた顔をしてこる。

確かに空間を詰めて寝れば、一人ならぎりぎり寝転げるだらう。
しかし、旧介の言いたいことはそういうことではない。

旧介の反応に、Hミアがはつと顔を赤らめた。そして旧介の背中
を遠慮なくばしばしと叩く。

「分かつた分かつた！ お前が女の子を襲つちゃうつてことね。
一日くらい我慢しなさいよ！」

「違う」

そして、旧介はあえて無視していた、その存在を振り向いた。
さきほど、旧介が突き飛ばされた時に勇敢にも抱き留めたその少女は、変わらずにそこに居る。

つまり、まだ旧介を抱きしめているのだ。

背中から腹に腕を回し、あまりに力強く抱き着いているメイルを見る。

幸せそうな顔をしていた。

「何が違うのや」

「……だから」

旧介はメイルからヒミアに視線を移す。

「襲われる可能性があるな、『イツじやなくて僕だ』
「はあ？」

小切な声で吐き出した悲痛な告白、ヒミアは眉を歪めた。

「……鬼の前に、ストーカー退治しつゝとか」

背中に幸福そうなメイルをくつつけたまま、旧介は憂鬱と吐き出した。

私の世界はこれからないと

最終的に、旧介とメイルは同室で眠ることになった。

どれだけ駄々をこねようが、小屋は小屋でしかないのだ。
寝るための部屋を増やそうにも、その方法が無いのである。

仕方がない。仕方がないことだ。

夜中にどうやって自身を守るつか考えつつ、旧介は腹に手をやつ
た。
小屋の罅ひびが入った窓から外を眺めれば、もつそろそろ田たが暮れそ
うだ。

椅子にもたれ掛かりながら、室内に田たを動かせば、メイルとHエミ
アの背中が視界に入る。

晩御飯の支度をしているのだ。

(まあ、こんな森で食つ飯めしだし、あんまり期待はしないけど)

Hエミアは鬼憑おにつきだ。

人間たちの迫害から逃げるために、こんな辺鄙な場所に小屋を立
てて暮らしている。

当然ながら、町で買い物をすることもできないだろう。
つまり、Hエミアは完全なる自給自足をしていくことになる。もし
くは、家族や親族にこいつぞり食料を送つてもうつっているか。そのど
ちらかだろう。

どちらであれ、上等な食材を持つてはいるとは考えにくい。

(……そういや、メイルは料理できんのか?)

旧介がメールに対して持つていてる情報は限りなく〇に近い。料理が上手いのか下手なのかも未知の世界であるのだ。

（見てる分には、苦労してねえみたいだけど）

それどころか、たどたどしい手つきで包丁を持つHニアを、うまくカバーしているようにも見える。

揺れる橙色と茶色の頭をぼんやり眺めつつ、旧介はジャージのポケットからメモ帳とペンを掘み出した。

（今回の鬼退治は、ちと面倒臭そうな感じがすんなア）

ペンでメモ帳に書き足して行きながら、旧介は自身の長い髪を弄り回していた。

「ほ、本当か？ あたしいろいろ失敗しちゃって。ほとんどメイルが作ったんだよ、それ」「そんなことないですよー。Hニアさんもお上手だったじゃないですか」

いつの間にか、名前で呼び合つ仲になつた二人のやり取りを見ながら、旧介は感心していた。

（確かに、後ろから見てた時もメイルがよく動いてたな。コイツ、料理できんのか。ストーカーってだけじゃねえんだなア）

初めてメイルの評価できる点を見つけたように思えた。

木製のスプーンで一口食べてみる。なぜ甘口であるかには触れないとして、普通に美味しいカレーだつた。

これで具が入つていれば文句なしなのだが。しかし、わざわざそれを言うのも野暮というものだろ？

旧介はカレーを口に運び続けた。

「香宮司くん、お、美味しい……？」

不安げな声に顔を上げれば、眉を下げてこちらを伺うメイルと目が合つた。

気にしてない振りをしているが、Hニアも氣になつてしているようで、聞き耳をたてているのが分かる。

「美味しいな。これなら毎日食いたい」

そう言つた瞬間、メイルの顔が一気に赤くなる。

「毎日つて毎日、え」と意味の分からぬ言葉を繰り返すメイルを一瞥し、旧介はまた食事を再開した。

混乱するメイルの隣では、エミアが必死で笑いを押し殺そうとしている。

(何でそこで照れるのかね。コイツはやっぱ分かんねえなあ)

プロポーズのような言葉を言った張本人は、その意味を全く理解していなかつた。

「何かあつたらすぐに声を出せ。鬼を刺激するなよ。鬼が出たら僕のところにすぐに来い。いいな？」

「分かつてるよ。すぐに行くさ」

夜。

旧介とメイルが眠る部屋と少しばかり離れたところで、エミアは寝ることになつていて。

鬼憑きであるエミアを一人にしていいものか悩んだが、それ程に距離があるわけでもないことに加え、エミア自身が一人でいいと主張したため、こういう配置になつたのだ。

とはいって、不安なものは不安である。

エミアが鬼に食われたとしても、間違えて契約してしまつたとしても、その時点で報酬は無くなるのだ。

それは何より避けなければいけない未来である。

真剣な顔をしてエミアを心配する旧介に、エミアは顔を僅かに赤らめながら「大丈夫だつてば」と明るく笑つた。

「あたし一人じゃないと、何か物音とかで寝れないタイプなんだよ。それに近いし、そんなに考えなくつたつて大丈夫さ」

「……なら、いいんだけどな。いいか。本当に、何かあつたりすぐ
に来い」

エミアの紅茶色をした田をじっと見つめたまま、何度も言つた言葉を再び繰り返す。

大事な依頼人であり、金の源であるエミアには、何があつても無事でいてもらつ必要がある。

エミアはもう一度「大丈夫だつて」と呟き、自身の寝床に向けて歩きだす。

「……でも、心配してくれてありがとな

小也なその声は田介に届かなかつた。

エミアの後ろ姿を見送つていると、背後から鈴を鳴らしたような声が聞こえてくる。

「香田向くん、布団敷けたよー」

「ん？ ああ

返事をしながら、声の方へと振り向いた。

薄っぺらく、かび臭い布団が室内にキツキツに敷き詰められてい
る。

その詰まつた臭いに眉をしかめながら田介は、メイルの座る布団の向かいに腰を下ろした。

「お前、襲うなよ
「襲う……つて、え、えつ」

忠告としてそう言つたのだが、メイルは思いもよらない言葉に田介を見開いて、またもや顔を赤くさせていた。

(あ、余計な心配だつたか)

さすがに、それ程馬鹿ではなかつたらしい。口を手の平で覆つてゐるメイルを見て、いらぬ杞憂を抱いていたことを知り、安堵の息を落とす。

「そ、それつて」

「あ？」

話をしつつ、旧介はかび臭い布団に潜り込んだ。湿つてゐる。日干しをしていなかつたのかもしれない。最悪だ。メイルも旧介に傲い、布団の中に身体を入れてゐる。

「まさか、あの、お、おお誘いですか？」

「違うけど」

「ですよねえ！」

えへへと、脱力しそうな笑い声をあげるメイルを見る。顔どころか耳まで赤くしてゐた。

もしかすると、あの独特な笑い方は、恥ずかしさを隠すためにしているのやもしない。

メイルに羞恥心が残つていたことに安心感を覚えながら、旧介は口を開いた。

「そういうばか」

「は、はいっ。何でしょう

「お前が言おうとしてた、僕を好きになつた切つ掛けつて何だつたんだ？」

「え」

瞬間、メイルの動きが止まる。
だが、旧介は言い逃れることを許はしなかつた。
深い橙色をした目を見つめる。
またメイルの肌が赤くなつた気がした。

「あ、ああ、あの、明日とかは」

「言え」

「でも」

「メイル」

「は、はい」

旧介の赤い目^が音もなく細められる。

「言え」

言つ以外に、選択肢は無い。

旧介の赤い目を見ながら、メイルはひしひしとそれを感じていた。

「……わ、私

「ああ」

ぼふりとメイルが頭から布団に潜り込む。湿っぽいそれに頭を突つ込むなんて、よくできたものだと感心しながら、旧介は言葉の続きを静かに待つた。

睡魔が足を引っ張るのを感じる。トンネルと森林と、今日はひたすら歩き続けたのだ。疲労も溜まつていて。

「^{じゅく}香富司くんに会つたことがあるんですね」

「そうか」

やはりと納得しながら、旧介はゆっくりと瞼を下ろした。
暗闇に染まる世界は、やけに居心地が良い。

「……昔の私は、生きる意味を持つていませんでした。いつ死んで
もいいような、そんな存在だったんですね」

瞼の裏に、ある情景が浮かび上がる。

『彼女』を失って、世界が死んだ旧介がそこに居た。
その時、旧介はいつもこいつ憑っていた。

「毎日、私はきっと世界にいらない存在なんだって、絶望していました」

そう思わずにはいられなかつたのだ。旧介にとつて『彼女』はまさしく全てだつた。希望も喜びも怒りも悲しみも、『彼女』は奪つていつた。

ただ、有り余る憎悪と殺意だけを残していつたのだ。

「でも、そんな私を、香宮^{こうぐう}くんが見つけてくれました」

そんな日が続く中、旧介はある少女を見つめた。

路地裏の狭い隙間に入り込んだそれは、まるで死体のようだつた。

「私は食べる物も何も持つていませんでした。私は、奴隸でした。
でもそれが嫌で脱走して、一人になりました。誰も汚い私に見向き
もしませんでした」

橙色をした目は何も映してはおらず、からっぽだった。

世界に絶望し、生きる屍と化した少女に、旧介は無性に苛立ちを

覚えていた。

「でも、香宮司レバウスくんだけは違った」

旧介の全てである『彼女』は消えた。消えてしまった。
だが、この少女はどうだらう。まだ希望も何もあるよつて、旧介
にはそう見えた。
あえてそれから田を逸らしていのだと想つた。
むかついた。

「私に声をかけてくれた」

お前、何してんの。

汚い恰好しやがつて、邪魔なんだよ。

旧介の言葉に優しさなど無かつた。どこまでも辛辣なそれに、少
女は不思議そうに首を傾げた。

「私に希望をくれた」

少女の腕を乱暴に掴み、旧介は店の中に連れ込んだ。
適当にこいつの服と、なんか食い物持つてこい。

旧介は店員にそう言つた。

「私の頭を撫でてくれた」

綺麗な姿になつた少女の頭を、旧介はぐしゃぐしゃと撫でた。風
呂に入つていないので、髪から頭垢かづけが落ちた。
それに旧介は小さく笑つた。

「私に」

それから店員に、旧介はありつたけの金を渡した。
このガキに働くとこをやれ。衣食住がしっかりしてないとがいい。
店員は困惑したが、金を見て口を閉じた。

旧介は少女を見た。

「生きる意味をくれた」

お前、僕の何より大切だった人に似てるな。
旧介はそれだけを言った。

「私の世界は香富司くんなんです」

メイルの澄んだ声が鼓膜を揺らす。

確かに、そんなこともあつた気がする。あの時から旧介の懐はとても寂しくなつた。

（それか……）

メイルの方を見れば、いつの間にか布団から顔を出して、メイルもこちらを見ていた。

「私の世界は、あの日からずっと香富司くんだけです」

その姿は、『彼女』を心酔する旧介にとてもよく似ていた。
いや、心酔などという軽いものではない。これは依存だ。
旧介はゆっくりと口を開いた。

その瞬間だつた。

甲高い悲鳴が部屋を満たす。それはエミアの声であつた。

ヒミアいつもも違和感ばかり

ヒミアには何かあればすぐこいつから走つてくるよう思えていた。にも関わらず、悲鳴だけで、ヒミアの姿が見えない。

「……つ、最悪だな

後悔をしたところで、遅すぎる。

旧介は布団から飛び出し、持つて来ていた鞄を乱暴に掴み、ヒミアの寝ている部屋に一目散に走り出した。

メイルも旧介についていく。

もともと、ヒミアと旧介達が寝ていた場所は遠くない。いや、むしろ近すぎるくらいなのだ。

それも当たり前だろう。

小屋の中で寝ていたということは、三人とも同じ条件なのだから。距離などあって無いようなものである。

時間にして、三十秒。

旧介は扉を壊すように勢いよく開いた。

「ヒミア！」

返事は無かつた。

森の夜は想像以上に暗く、月明かりも木々に遮られ、ほぼ入らな
いといつていい。

こんな森の奥に建てられた、家とも呼べない小屋に、当然ながら電気が引かれているわけもない。

ヒミアの部屋は真っ暗だった。だが、返事が無いことから考えて、ここに居ないのか。

もしくは。

(……返事もできないくらいに、怪我をしているか、か)

目を凝らし、耳を澄ませる。

室内に人影らしきものは無い。しかし、先程の悲鳴は確かにこの部屋の方から聞こえてきていた。室内に足を踏み入れる。

静寂。

「エミア、どこだ？」

呼びかけにも、答える声は無い。それが指示する答えはただ一つしかなかった。

エミアはここに居ない。

だが、おかしい。エミアを襲つた何かがいるとすれば、それは鬼以外にいないはずだ。

鬼が、わざわざ人間を攫うなんて面倒臭いことをするだろうか。

(するわけがない)

今まで旧介が見てきた鬼はそんなことしなかった。人喰いの鬼なら、そんなことはしないのだ。なら、エミアを狙つていたのは、あと一つしかない。

契約の鬼だ。

「……くそ」

「香富司くんつ、そ、外に！」

「外？」

メイルの焦つた声に、窓から外を見る。森に広がる暗闇の中、それは居た。

「……あれは、

そこには影があった。

真つ黒で、人より一回りほど大きいその姿は、あまりに異質である。

体中に包帯のようなものがぐるぐると巻き付けられ、雲の絵が書かれた面を付けた姿には、見覚えがあった。

肌は黒く、周りの暗闇と同調している。ただ、羽織つている白い着物だけが、その姿を際立たせていた。

お面を付けたミイラ男が、死装束を着ているような、あまりに珍妙な姿。

妙な姿。

鬼だ。

「まじで現れやがって……」

旧介は、鞄からすらりとした細長い太刀を取り出した。鞘に手をかけつつ、窓から外に出る。

「メイル。お前はここで隠れてろ」

「香富司くん……」

「いいな?」

メイルは不安そうに瞳を揺らしながらも、小さく頷いた。

本当は旧介に付いていきたいのだろう。

だが、メイルは知っていた。

自身がどれ程に非力であるかを、よく知り尽くしてしまっている。たとえ、旧介に付いていったところで、邪魔にしかならないと分

かつていた。

だからこそその答えに、旧介は満足げに小さく微笑んだ。

(…… わて)

走る。

できるだけ音を立てず、呼吸も隠し、木々の影に身を寄せながら、
旧介は鬼に近付いていく。

鬼は旧介に気付いていない。

まだ、気付いていない。

風も無いじめじめとした森で、気配を隠しきるのは困難を極める。
ゆっくりと、静かに、距離を狭めていく。

鬼はここちらを見ていない。

できることなら、戦いたくはなかった。どこかに消え去ってくれ
るのが一番有利難いが、そう簡単に事は進まないだろう。
近付くにつれ、鼻を刺激する腐臭に旧介は眉を歪めた。
肉を何年間も放置していたような、嘔吐を誘う臭いだ。
それは鬼の特徴の一つでもある。

鬼の背後にある大木に身体を潜め、その姿を窺う。

鬼はぼうっと、ぬかるんだ地面の上に立ち廻っていた。その着
物には、といひどいろ赤い染みができる。

(血まみれの鬼……あいつか)

HIIIAの言っていたことが正しければ、あの鬼こそ、HIIIAを狙
つている鬼であるのだろう。

鬼は動かない。

木々に遮られ、見える筈のない夜空を見上げている。

その鬼の先を見て、旧介は目を見開く。

エミアが、いた。

意識を失っているらしく、鬼を目前にしてもピクリとも動かない。その身体は血まみれだった。

(早く助けねえと、やばいな)

かといって、がむしゃらに突っ込んで行つただけでは無駄死にする羽目になるだろ？

とりあえず、エミアから鬼を離さなければいけない。あまりに距離が近すぎる。

旧介は周りを見回し、落ちていた石を拾い上げた。失敗は許されない。

(……よし)

木々の影に隠れながら、走り出す。目指すはエミアのいる木だ。中間あたりの距離にかかつた時、旧介は持っていた石を投げた。カツン。大木に当たつたらしい石は、そんな音を響かせた。

瞬間である。

鬼が動いた。速い。音源の木にまで鬼が走っていく。
あまり時間はない。

「エミア」

気絶したエミアを抱き抱え、声をかける。血に身体を染めている割に、目立つた怪我はない。

違和感。

だが、長い間考えているわけにもいかない。

旧介はエミアを肩に担ぎ、小屋に足を向けた。とりあえず、メイルに怪我の治療をしてもらう必要がある。

少し走れば、すぐに小屋にたどり着く。
窓を開き、メールにエミアを乱雑に預ける。

「え、エミアさんっ。まだ大丈夫ですか」「
気絶してる。外傷は無いように見えるけど、一応診てやれ
わ、分かりました！」

顔を真っ青にさせ、メールは自身より長身のエミアを何とか引き
ずつて行く。

それを見届け、旧介は鬼がどこにいるかを探りつつ振り返った。
そして、動きが止まる。
ゆらゆらと蠟燭の火が揺れるように、不安定な闇を晒し、それは
静かに立っていた。

鬼だ。

いつの間にここに来ていたのか。音も気配も何もしなかった。
振り向くまで、旧介は鬼が後ろにいることを全く知らなかつたの
だ。

「……よオ、そんなにエミアと契約してえのか？ ちょっとしつこ
すぎやるだろうよ」

当然ながら、返事はない。

鬼は、ゆらゆらと不気味に体を震わせているだけだ。

旧介は鞘を抜き去り、地面に放り投げ、刀を両手で構えた。刀が
得意というわけではない。ただ、この場合、刀しか使えない理由が
あるのだ。

踏み込む。

それと同時に、鞘を足で蹴り上げた。

鬼を目掛け、飛んでいく鞘に隠れるようにして、旧介も走る。

鬼は何でも無い」とのよつて、柳のよつた手で鞄を受け止めた。

「駄目だろ」

受け止めた瞬間、鬼は奇声を発し、鞄から急いで手を離す。だが、遅い。

バラバラとその指が崩壊していく。

暴れる鬼に旧介は飛び込んだ。

「鬼さんこちゅう」

刀で思いつきり、その身体を切り付ける。じわりとその傷から焦げた臭いが広がり、また崩壊が始まつていく。

「手の鳴る方へ」

鼓膜を突き刺すような悍ましい音に、旧介は眉を歪めながら、鬼の傷に手を突っ込んだ。抉る。

絶叫が森に響き渡る。

瞬間、鬼のもつ片方の手が旧介の頭田掛けて振り下ろされた。

「まだだろオガ」

冷酷な声と共に、旧介が片手を振った。何が転がつていく。

腕だつた。

鬼の腕が、切り落とされていた。

「痛い？」

悲鳴。

旧介の顔には、何の感情も無かつた。無感情に鬼を虐殺しているのだ。

「痛くない？」

崩壊し始めた両手と胴体に、鬼は吠えた。

そして、腹に旧介の手が埋まっているにも関わらず、突進する。恐ろしい力だ。

足を踏ん張るもの、敵わずに旧介は後ろに飛ばされた。体勢を崩すような失敗は犯さず、ぬかるんだ地面に剣を突き刺し、何とか堪える。

「馬鹿力かよ」

風を感じた。

今まで鬼の手が迫っている。それは崩壊も何もしてはいなかつた。

あまりのスピードに受け止める事もできず、旧介は横に向かって転ぶように避けた。

湿った土が体中を濡らす。

だが、そんなことに構つていられる暇などない。刀を持ち、鬼を見据える。

「……あ？」

そこに鬼はいなかつた。

周りを見渡す。どこにもあの黒い姿は見えない。

消えたのか、はたまた、隠れて隙を窺つてゐるのか。気付けば、旧介の息は荒れていた。

「……ビルに行つた」

逃げたのだろうか。何故、逃げる必要がある？
旧介と戦つていて、確かに不利にはなつていた。だが、それだけだ。

あの突進力と、傷が消えていた手。
力押しをしていたならば、状況など簡単に変わつていただろう。
それは鬼にも分かつてゐるはずだ。知能の高い、契約の鬼ならば
余計に。

(なんだこれは)

また、違和感。

どういふことだ。ビルに来てから、おかしい」とばかりが重なつ
ている。

まるで何かのヒントのように、欠片だけがばらまかれているのだ。
ぞわりと。

刀を首に突き付けられたような、恐怖が旧介を襲つた。
息ができなくなる。

圧倒的な敵を目前にしたような、あまりに冷たい恐ろしさ。

「香宮同くん！　エミアさんの治療が済みましたよ

メイルの声が響く。

その瞬間、今まで感じていた恐怖感がすつと消え去つた。

声のした方向を振り返れば、エミアに肩を貸したメイルが、こち

うに歩んでいく。

(なんだ、やつきのアレは)

あの鬼と対峙した時でさえ、あれほどの恐怖は感じなかつた。
何かがある。

違和感が積み重なつていいくのを感じながら、旧介は頭上を見上げ
た。

やはり夜空など見えない、ただの闇がそこにはがつてゐる。

そして正解です！

とにかく森の暗闇の中、呆然と立ち尽くしているわけにもいかず、旧介達はまた小屋に戻っていた。

エミアは依然として意識を戻さない。先程のようにバラバラでいるわけにもいかないため、今は同じ部屋で寝かせている。

いつあの鬼が再びやつて来るか分からぬ。確かに、旧介は鬼に重傷を負わせたが、それを理由にこのまま引き下がつてくれるわけも無いのだ。そのくらいで諦めるようなら、鬼は化け物などと呼ばれはしない。

（さて、どうするか……）

そして、何より気になつてゐるのが、先程感じたあの威圧感である。戦わずとも分かつてしまふ。あれを出した奴は相當に強い。だが、その『奴』がいつたい何であるのか、旧介には全く分からなかつた。

エミアを狙つた血まみれの鬼ではない。あの鬼からはそれ程の威圧感は感じられなかつた。

だが、そうであるなら、『奴』はいつたい何だ？ 敵ではあるのだろう。味方ならば、旧介を威圧する意味が無い。

（くそ、おかしいことばかりじゃねえか）

違和感。

ここに来てから、いつたい何度その感覚に捕われただろう。原因も理由も何もかもが不透明な中、それだけが異常なまでに目立つてゐるのだ。

どこからおかしいか。それを考え直さなければならないだろう。旧介の表情は変わらない。だが、その赤い目だけが旧介の焦りを表すように、小さく揺れていた。

「香宮司くん、大丈夫ですか……？」

不安げな高い声に、ゆるりと顔を上げれば、眉を垂れ下げたメイルと目が合った。橙色をした大きな目はこんな時でさえ深く、そして綺麗な色をしている。

心配そうなメイルの顔を見て、旧介は苦く笑つた。感情を堪えるのは何より得意であったのだが、どうやらそれも下手になつてきているらしい。

もしくは、メイルがやけに人の感情に鋭いのか。

どちらでも構わない。焦りを悟られたのは、事実であるのだから。

「大丈夫だ。さっきの鬼が急かっただけで」

「……そうですね！香宮司くんなら大丈夫ですよね。いらない心配でした」

「全くな」

氣を使わせている。

それが分かつた。メイルは旧介の焦りに気付いたのだ。だからこそ、旧介の言葉はただの見栄であると分かつた筈である。それをえて鵜呑みにした。

これはメイルの優しさだ。

(……それだけだろ)

メイルとの過去を思い出す。

確かに、旧介は孤独なメイルを救つた。しかし、それだけで旧介

のために死んでもいいなどと思うだろうか。

あの時メイルに服と居場所をやつたのは、ただの気まぐれでしかない。言い換えるならば、あそこに居たのがメイルでなくとも、旧介は同じ行動をしていたのだ。

どうでもいい、小さな事でしかない。事実、旧介はメイルに言わるまでその過去を綺麗に忘れていたのだ。

だからこそ、やはり、メイルが理解できない。

「……って、お前」

「はい？」

ティーカップを両手で持ち、旧介の口に近付けていたメイルの動きが止まる。湯気が頬を熱くするのを感じながら、旧介は幸せそうな顔をした少女を見つめた。

「何してんの……？」

低い声だった。

地を搖るがすような怒りが籠められた、冷たい声にも、メイルは笑顔を絶やさない。

「喉渴いたかなと思ったので」

「思ったのでじゃなくて、何でお前が飲ませようとしてんの？」

「え、そ、それは……」

メイルが顔を赤らめ、恥ずかしそうに目を下に伏せた。

どうしてそこで赤面するのか、旧介には全く理解不能である。

わざとらしくちらりとこちらを一瞥した後、メイルは小さな声で呟いた。

「香富^{こうふ}くん猫舌だから、冷ましてから飲む方がいいかなと思つて……」

「猫舌を知つてるのはいい。いいとして、それでどうして飲ませる方向に転換した？ 普通に渡せよ。それに」

旧介はメールからティーカップを取り上げ、中に入った紅茶を見る。

「勝手にHニアの家の茶葉使つなよ。こんな小屋に住んでんだ、食料だつて少ししかねえだろ？」

「……え？」

Hニアは鬼憑きなのだ。一般人のようには、簡単に買い物をすることもできない。

それはメイルも知つてゐるだろ。そう思い注意した旧介の言葉に、しかしメイルは頷かなかつた。それどころか、旧介が何を言つてゐるか理解できないというように、疑問の声を上げる。

その反応に、旧介はまたあの感覚を覚えた。違和感。

「……だから、Hニアの家に食料は」

「ありましたよ？ いっぽい。Hニアさんに勝手に使つていいとも言されました」

「……いっぽい？ 食料が？」

「はい」

何故、鬼憑きであるHニアの家に食料がある？

エミアは町の人間から迫害を受け、この小屋に逃げてきたのだ。だからこそ、町に買い物に行くこともできない。

（……それは、本当か？）

なら、どうしていきなり泊まることになつた旧介とメイルの分の食事まで、用意することができたのだろうか。

それ以前に、カレーライスを作ることなど可能だろうか。買い物にも行けず、森でほそぼそと暮らしているにも関わらず、だ。嫌な予感がした。

「……あのカレー、具が無かつたよな」

唐突な言葉にメイルは少しく首を傾げ、それから可笑しそうに笑つた。

「いえ、あれは……ヒミアさんがじゅがいもとかを小さく切つてたから、ルーの中で溶けちゃつたんですよ。みじん切りみたいになつてたので」

どうして、カレーライスを作ることができたのか。それに加え、何故野菜までつたのか。

貧しい筈の家に、それだけの薦えがあるだろうか。あつたとして、わざわざ旧介とメイルのために、使つたりするものだろうか。使うわけがない。

使うわけが、ないのだ。

(いや。それより前から違和感はあつたじゅねえか)

旧介が宿に戻ると言つたとき、ヒミアは必死になつてそれを止めた。鬼が怖かつたのやもしけない。しかし、また戻つてくると言つた時でさえ、ヒミアは耳を貸そつとはしなかつた。

(何でだ)

また、Hミアが近寄った時、旧介は眉を歪めずにほいられなかつた。あれはHミアがあまりに近すぎたところもある。しかし。

しかし、それ以上に気になることがあつた。氣のせいだと思つて、特に意識してはいなかつたが。

Hミアから微かに血の臭いがしたのだ。

あまりにも微かなものであり、また、Hミアが包丁を使つていいなのを見てから、単に指を切つただけかと思つていた。

(……何でだ、だと?)

わざわざ小屋に田介達を泊めたといつのこと、Hミアは頑なとして一人で寝ることを選んだ。鬼に怯えていたのならび、無理にでも二人で寝ようとするものだろう。

矛盾。

(おかしかつたのはどこから、か)

血まみれであつたにも関わらず、Hミアには田立つ外傷もなかつた。

ならば、あれは誰の血だ。

(……躍られていたのは、じつだ)

「やつにえば

メイルの声に顔を上げる。

ぞわりぞわりと背中に何か冷たいものがはい上がつてくるような、得体の知れない気持ち悪さを感じながら、旧介は黙つていた。

「香富司くん、気になることがあれば、一人の時にいつでも言つてくれましたよね？」

「……ああ。何だ？ 何か気になることがあつたか」「小さなことなんですが」

そう前置きをしてから、メールは指を顎の下に置いた。数秒、考え込むような仕種をした後、旧介を見直す。

「……笑つてたんですね」

「笑つ、て……？」

「は、はい。エミアさんが

じわり、と。

積み重なつた違和感が、背中に覆いかぶさるような、奇妙な重さを感じる。それは、旧介の中にだんだんと侵入し、毒のように全てを壊していく。

「香富司くんが、鬼を退治できるか分からなって言つたとき、顔を俯かせてたじゃないですか」

「ああ」

そうだ。

エミアは肩を震わせ、顔を下げていた。鬼を退治できるか分からないことを知り、絶望感に苛まれていたのだと。そつ、旧介は思つていた。

だが、そうでないとするならば。

「笑つてました。耐え切れないと感じで肩まで震わせて。あれつて思つたんですが、香富司くんは気付いてなかつたと思って」

メイルは人の感情に機敏だ。だからこそ、気付いたのやもしかつたのだ。

(ああ……でも、そうか。そういうことか)

どこからおかしかったのか。簡単だ、最初から全てがおかしかつたのだ。

旧介は笑っていた。笑わずにいられなかつたのである。何故気付かなかつたのだろう。少し注意して見ていれば、あまりにも分かりやすく答えは落ちていたというのに。

「もう少し、疑心暗鬼になるべきかもなア」

あの、威圧感。

旧介に恐怖を覚えさせた、圧倒的な威圧感はメイルの声と共に消え去つた。

そして、そこにはメイルに肩を借りたエミアが居たのだ。

「なあ、メイル」

「はい」

旧介は静かに椅子から立ち上がり、鬼切りの刀を握り締めた。それに傲い、メイルも素早く足を伸ばす。

「どんな風に笑つてた?」

「へ?」

「エミアはどんな風に笑つてたんだ?」

そして、旧介はゆっくりと振り返る。そこには布団で寝ているエ

ニアがいた。

「……馬鹿にした、感じの。そういう笑い方でした」
いや、寝ているのではない。寝ている振りをした、ニアがいる
のだ。

(そりやア、馬鹿にもするや)

「なあ、ニア」

旧介の声に、ニアは瞼を開いた。紅茶色をした美しい瞳が天井
を見つめてから、旧介たちを映し出す。

そして、ニアは笑った。

今まで必死に我慢していたものが、ようやく解放されたよ

、
大きく高らかに笑い声を上げる。

それに釣られ、旧介も笑った。嘲笑である。

「ニア、か。いや、違う。違うよな。ニアだったんだ

「まだ狂ったように笑い続けるニアを、無感情に一警し、旧介
は口を開いた。

「なあ、鬼サン」

それが違和感の正体であった。

ふぞけた鬼Jリ始めます

高らかな笑い声が、小屋の中を支配する。それは今まで旧介たちが聞いていたヒミアのものと何ら変わり無い。笑いすぎて息切れを起こしながら、ヒミアはゆっくりと時間をかけて布団から立ち上がった。茶色をした長い髪がさらりと揺れている。

「ああ、もつ、駄目だよ。面白すぎるんじゃないの。アタシを笑い死にさせようとか思つてたわけ？ いや、そんなこと思つてたわけないよね。必死でアタシを守るつとしてたんだし。あああああ、もうう！ アタシがばらまいてつたヒントにいつ気付くかなつてドキドキしてたんだけど、なつかなか気付いてくんないから、さあ。今まで笑い堪えるの大変だつたんだよ」

つらつらと堰を失つたように、どこまでも楽しげな聲音でヒミアは言つた。紅茶色をした瞳は、獲物を前にした肉食獸のようにぎらぎらと煌めいている。

旧介は氣付かれないように、ちらりと窓と扉を盗み見た。窓はちよつびヒミアの背後にあり、扉は旧介から一メートルほどの場所にある。

逃げるか、否か。

逃げることを選択したとして、ヒミアがそつやすやすと旧介とメイルを逃してくれるだらうか。

答えはノーだ。逃がしてくれるわけがない。でなければ、こんな無駄に手の込んだ事をする必要性が無いのだ。

ヒミアは旧介たちを殺す氣なのだらう。

「……あの鬼は」

「んん？」

「あの鬼とエミア、お前は血まみれだったな。あれは誰の血だ？」

「ああ、あれね」

唐突な話題転換が、ただの時間稼ぎだといふことは、エミアにも分かつてしまふだろう。それを証拠付けるように、エミアは余裕たっぷりに微笑んだ。こちらの疑惑など全てお見通しだとでもいったげな、勝ち誇った顔だった。それでも、エミアがあえて旧介の言葉に乗つたのは、単なる気まぐれ以外の何物でもないのだろう。

状況は最悪だった。

あの時感じた威圧感は、確実にエミアのものだ。あれほどの恐怖感に苛まれたという」とは、エミアは相当の力を持つていることになる。

旧介には分かつていた。どう足搔こうが、エミアには勝つことはできないと。

「あれは町の人間をテキトーに搔つ攫つてきて、殺したときの血だよ。いやあ、ちょっと緊迫感出したいなあって思つて。さすがに無傷だとなんかアレじやない？」

「あの鬼はお前の仲間か？」

「仲間ア？ そんなわけないじゃんか！ アタシの計画にはあんな奴含まれてなかつたもの。勝手に出てきたから、利用しただけ」

手をパタパタと振り扇ぎ、エミアは心底嫌そうな顔をつくつた。

「……つまり、本当なら鬼はいなかつた」

「そう。あいつ何なんだろね？ よくわかんないわ」

「鬼退治と称して僕らを呼んだのは、単に暇だったからか？」

エミアはその問いに、大きく頷いた。そしてどこから取り出したのか、髪ゴムを指先で器用に持ちつつ、その長い髪の毛を乱雑に結ぶ。

「ねえ、旧介。お前は間違ってるから一応訂正するけど」

ポニー・テールに結わえられた長い茶色の髪の毛が、エミアの動きにそつてふわふわと揺れている。

「アタシは鬼じゃない」

「……正確に言うなら、鬼と契約した人間なんだろうよ。でも普通の人間からすりや、お前は立派な化け物の仲間だ」

「化け物。化け物。化け物、ねえ」

化け物という言葉に、今まで綺麗な微笑みを保っていたエミアの顔は、醜く歪んだ。

ぎりぎりと歯を噛み締め、目を憎悪に燃やしている。そこから感じられるのは深い憎しみであつた。

「お前ら、何なの。アタシは人間で、でも鬼憑きなんかになっちゃつただけ。被害者じゃない。なにお前らはアタシを化け物として扱いやがる。アタシは人間だ。人間なんだ！ 化け物として退治されなきやいけないって何でさ。おかしいだろ！ アタシは人間だ、人間だよ」

怒りに任せた絶叫に、旧介は眉を歪めずにはいられなかつた。鼓膜が痛い。それほどに、怒りと憎しみが込められた、しかしどこどなく悲痛な叫びであつた。

「鬼憑きだらうが、鬼と契約しようが、別にお前は退治されねえだ

ろうが。退治されるのは鬼だけだ」

「綺麗事じゃない。もしそれが真実なら、アタシは鬼を退治しても
らって今頃幸せに生きていられたはずだもの」

「……何で契約なんかした。契約して人を殺せば、犯罪だと分から
なかつたのか」

あまりにも馬鹿馬鹿しく、愚直な問いを吐き出す田介を見て、エ
ミアはまた唇を笑みの形に変えた。

「ハア、とその口から吐息が漏れ出す。ため息とは違う。どちらか
と言えば、安堵感から出たようなものである。

エミアは細長い指先を、ゆっくりと見せ付けるように自身の胸に
置いた。

「アタシはね、鬼を化け物とは思つてない。化け物だなんて思えな
い。コイツは、アタシが人間から迫害されてたとき、唯一アタシに
優しくしてくれたんだ。アタシの理解者だ。それに比べて」

胸に置かれた手が握り締められていく。肌が白くなるほど強く握
られた手は、怒りのためか小刻みに震えていた。

「人間は最悪だ。アタシの苦悩を辛さを悲しみを誰も理解しようと
せず、それどころかアタシが人を襲うだなんて頭のおかしい妄想ま
でしやがる」

「お前は人を殺したじゃねえか」

「あいつらがそう馬鹿の一つ覚えみたいに考へてるからさ。期待に
答えてやつただけだよ」

「……それは本当か？」

田介の確認に、エミアは僅かばかり驚いたらしく、紅茶色の目を
しばたかせた。

数秒の沈黙。そして、それは直ぐにエミアの笑い声に搔き消される。

「すごいな。旧介、お前もアタシの理解者になってくれるのかい？」

「なんで嘘だと思うのか聞かせて欲しいところだね」

「嘘だと思ったわけじゃない。お前が町の奴らに腹立てたのは真実なんだろう。ただ、それで簡単に人なんて殺せやしねえさ。お前はもともと普通の人間だつたんだ。だからこそ、人なんて殺せない。そんな覚悟があるわけないからだ」

「……いいねえ。じゃあ、アタシはなんで人殺しをしたんだい？」

鬼と契約すること自体は、別に罪ではない。ただ、そうすることにより、周りの目はがらりと変わるだろう。しかし、それを気にしてない人間なら、異能能力を手にすることに惹かれ、鬼と契約してしまう。

鬼と契約しても、人間が人間であることに変わりはない。確かに、それは綺麗事だと旧介は思った。

「……鬼と契約すると、最初にとんでもない破壊衝動を感じ、次に人殺しに魅力を感じるようになる。その衝動には個人差があるけど、絶対にその殺人願望からは逃れられない。鬼と契約するということは、鬼を受け入れるということだ。鬼はもともと人を喰つて生きてる。鬼を受け入れることにより、考え方や行動が鬼と同調してしまってから、契約者はもう人間とは呼ばれない」

だからこそ、鬼と契約した人間が起こす事件は後を絶たない。殺人という最低な行為に快樂を見出だしてしまうのだ。

契約者はもはや人ではない。あまりに中途半端な化け物だと、旧介はそう思っている。

「お前は抗えなかつた。鬼の馬鹿馬鹿しい誘いにも、そして、殺人願望にも。それはどうしようもない罪なんだろうよ」「そうだね。そうかもしれない。でも、アタシはそれについて一切の後悔もしない」

はつきりとした意志を持ち、エミニアは凜とした声でそう言った。その姿を見て、旧介は静かにため息を落とす。

「それに、人殺しが罪だ何だと言つけれど、それはあくまでも建て前でしか無いじゃないか。契約者が殺人をしましたなんていつても、それが見逃されるケースなんて腐るほどある。……ねえ、旧介」

確かに、鬼に関することは綺麗事と建て前ばかりで、汚い部分は意図的に隠されていいといつてい。無責任に壁だけを作り、ジョーカー以外は鬼を殺してはならないなどといつ、ふざけたルールを作り上げた政府だ。政府にとつては、鬼が人を殺すことよりも、鬼がどれだけの利益を生むかが重要なことである。だからこそ、鬼についてでは甘く見られる部分も多い。

わざわざエミニアの言葉に肯定することはせず、旧介は沈黙を保つたまま、ある機会だけを窺つていた。

「お前はもともと殺すために呼んだんだけどさ、アタシ、予想外にお前が気に入っちゃつてさ。どうだい？ 鬼退治なんてあほらしいことやめて、一緒に生きていかない？」

エミニアの目が愉快そうに歪められる。答えを知つているからこそ、の誘いであることは、旧介にも直ぐに分かつた。

エミニアにとつて、これは暇つぶしでしかない。

「……生憎お前みたいなのはタイプじゃねえからさ、お断りしどく

よ

「だらうね。アタシはお前みたいなタイプなんだだけじゃ」

殺し甲斐があつて、とっても楽しそうだと、美しく微笑んだまま
エミアはそう言った。

それが始まりになる。

旧介は、今まで黙つていたメイルの手を強く掴み、扉から飛び出
した。時間は無い。強者はどちらか、弱者はどちらか。それが、無
様にも分かつてゐるからこそその逃亡。

エミアは追いかけっこない。追いかける必要性など無いからだろ
う。エミアが本気を出せば、直ぐに旧介たちは捕まるのだ。

「鬼うつ」か。馬鹿みてえ

苦しみ紛れに吐き出した言葉は、闇の中で死んでいった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8951z/>

ジョーカーな狐と狸さん

2012年1月10日18時45分発行